

## &lt;研究ノート&gt;

## 子どもが感じる世界を感じる ：音との出会いを通して

### Feel the world that children feel : through encounter with sound

林 浩子

HAYASHI Hiroko

遊びや生活の中で、子どもたちが様々な音と出合うとき、不思議さや面白さを感じ、心を揺り動かす。感じるという営みが子どもの表現や知的好奇心を生み出し、子どもの世界を広げていく。そのような子どもの営みに教師がおもしろさを感じ、心を揺り動かし、支えていくとき、子どもと共にある保育へと拓かれていく。本研究は、具体的保育実践の中で、子どもと音との出会いを通して、子どもが感じることで対象を知っていくプロセスと、保育者がその営みをどのように感じ、子どもを知ろうとしていくのか、情感的関わりの中の感じることの二重構造を明らかにした。

キーワード：音と出合う、感じる、感じることの二重構造、「ともに」ある保育

## 1. はじめに

### 感じるという知り方

幼稚園教育要解説（2018）<sup>(1)</sup>に、「保育は環境を通して行うもの」と記されており、それは、子どもが能動的に人やもの、ことに出会い、関わることを意味する。それらの出会いや関わりの中で、子どもたちは「不思議だなあ」「面白いなあ」など様々なことを感じ、心を揺り動かしていく。それゆえに、保育において、教師は、子どもが感じることを大事にしているが、一般的に、感じるということ、自分の中の意識の感覚やその喚起として、或いは、何かを知る前段階の営みとして捉えがちである。感じることの意味とは何だろうか？

レディ（2015）<sup>(2)</sup>は、人は、以下の3つの関わりによって対象と関わり、対象を理解し、対象を知っていくと述べている。一人称的関わりは、対象を自分と同じとみなして関わり、自分が感じることを相手の気持ちや思いとして推察する知り方である。三人称的関わりは、対象を私から切り離し、何らかのカテゴリーでくくった集団の一員とみなして関わり、一般的な定義や理屈で理解する知り方である。一人称的関わりも三人称的関わりも、対象への応答性は切り離されている。一方で、二人称的関わりは感情的関わりで、対象の要求 (needs) にいつでも応答する関係の中で心が揺り動かされ、対象への感情が生まれることで対象を深く理解し、知っていくことを可能にする。そこにあるのは、感じる (feel) という知り方である。つまり、感じることによって、人は対象を知り、対象を理解していく。

### 子どもと教師の関わり

図<sup>(3)</sup>に記したように、子どもが人やもの、ことと二人称的に関わりながら感じる世界がある。そのような子どもの世界を、教師が二人称的に関わりながら感じることで、保育における教師の援助である。

しかし、子どもが対象に二人称的に関わる世界に心を寄せて応答することなく、教師がやらせたいことだけを一方的に子どもに「させる」ことが教師の援助や役割と捉える保育が横行していることは否めない。それは、一

人称や三人称的関わりの保育である。そうではなく、子どもが人やもの、ことと二人称的に関わり、感じる世界に、教師が二人称的に関わり、感じることで対象を深く知っていく。そこには、感じることの二重構造がある。

本研究では、保育の中の子どもと音との出会いに注目して、子どもが対象と出会い、感じることで対象を知っていくプロセスと、保育における、感じることの二重構造の重要性を明らかにした。

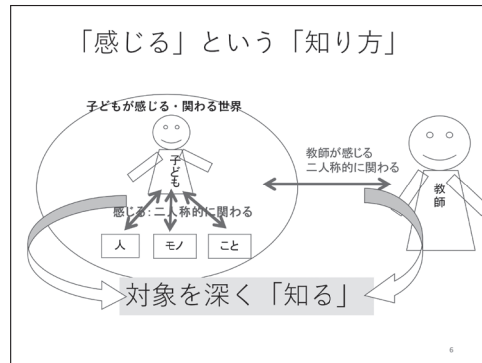


図 「感じる」という「知り方」

## 2. 実践現場での問い

幼稚園教育要領解説（前掲書）で、感性と表現に関する領域「表現」の〈ねらい〉と〈内容〉は、次のように記載されている。

【感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする】

以下に、上記の〈ねらい〉を達成するために指導する事柄となる〈内容〉の、音に関する表記を抜粋する。

- (1) 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気づいたり、感じたりするなどして楽しむ
- (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
- (5) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器をつかったりなどする楽しさを味わう。

ここには、子どもたちが生活の中で様々な音に気づいたり、感じたり、音を動きで表現したりすることの目的は、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにすることだと示されている。本当にそうだろうか？ そうであるとき、教師は子どもに対して、そのような力をどのように養うのかという方法論に目がいきがちになることは否めない。そもそも、幼稚園教育要領解説には、遊びや生活の中で子どもたちがどのように音に出会い、関わっているかについての記述や、その意味の探究はなされていない。

そこで、遊びや生活の中で、子どもがどのように音と出会い関わっているのかを、筆者が兼任する国立音楽大学附属幼稚園の具体的実践の中の子どもたちの姿から探究した。

## 3. 対象との関わりの中で出会う音

### (1) 自然の音に気づく

写真1は、雨降りという出来事（こと）の中で、子どもたちが雨の音や振動、重さを、傘を通して聞き、身体で感じている場面である。「ポツポツって（音が）聞こえるよ」や「雨がトトト…って降ってるね！」など、子どもたちは雨の音に耳を澄ませ、その様子をオノマトペで表現した。傘をささずに雨を直接手に受けたときには、

音が聞こえないことにも気づいた。

また、雨が強く降った日は、その感じ方や表現の仕方が異なった。このように、子どもたちは雨が降るという自然現象を、音や身体を介して感じ、面白がった。

写真左手前の子どもは、両手で持った傘を上につきあげ、片足を振り上げている。教師がピアノを吹いて、子どもと雨の出合いの場面に音楽を加えることで、子どもたちの雨との出合い方や感じ方は広がり、雨との関わりを楽しめるものにしていった。



写真1 雨の音と出会う（4歳児）



写真2 竹の音と出会う（4歳児）

## （2）モノとの関わりの中で音に出会う

写真2は、大学から運んだ竹を園庭に置くと、子どもたちが集まってきて竹を叩き始めた場面である。子どもたちは、自らが砂場用具の中から選んだ木の棒を使って竹を叩き始めた。「いい音するね」「カッカってお祭りみたいだね」と、叩くことで生じる竹の音に気づいたり、自分が知っている音に重ね合わせたりした。そのうち、友達が叩く音のリズムを聞いて、相互に真似をし始めた。

写真3は、屋上プールにできた氷と関わる場面である。初め、子どもたちは手で氷に触れ、その冷たさを感じた。その後、写真2と同様に、自らが選んだ砂場用具の木の棒や、カットした竹を使って氷を叩き、砕き始めた。

「ガシャン」「シャリン」など、自分が氷に働きかけることで氷が砕けてその大きさや形が変化していくことと、そのときに生じる音を聞いて面白がった。



写真3 氷の音と出会う（3歳児）



写真4 音を見立てて試す（3歳児）

竹との出合いでも、氷との出合いでも、誰が教えたわけではないのに、子どもたちは自分の手でなく砂場用具

の中から選んだ木の棒やカットした竹を使って、対象である竹や氷を叩いたり砕いたりした。子ども自らが、対象との関わり方を選び、関わっていった。もし、目の前に花が置かれたとしたら、子どもたちはすぐに花を叩いたり、砕いたりはしないだろう。木や竹を使って打つ、叩くという子どもたちの氷への働きかけは、氷という対象にアフォードされ、対象から引き出されている<sup>註</sup>。そして、氷と出合い、氷から引き出された働きかけの中で音が生まれた。つまり、子どもと対象である氷との双方向の関係の中で音が生まれ、その音に子どもたちは気づき、面白がり、さらにまた働きかけていった。そこには、子どもと氷との対話がある。

### (3) 音を見立て、試し、つくる

写真4は、3歳女児がスノコヤ木の板、木製トレリスを運んでおうちを作った場面である。「(自分は) 大工さんなのよ」と、木の棒をトンカチに見立て、運んできたおうちの素材を叩いて色々な音を聞いた。叩く対象によって生じる音の違いに気づき、何度も試して音の違いを面白がった。

写真5は、無造作に様々な大きさや長さの竹筒を叩いていた子どもが、砂場の用具置き場の上に竹筒を並べた場面である。筒を整然と横に並べて叩くことで、筒の長さや大きさによる音の違いがより明確になった。また、縦や横など竹筒の配置によって音が異なることに気づき、色々な並べ方を試した(写真6)。この後、竹筒を2段に並べて置き、新たな音を試したり、作ったりしていった。

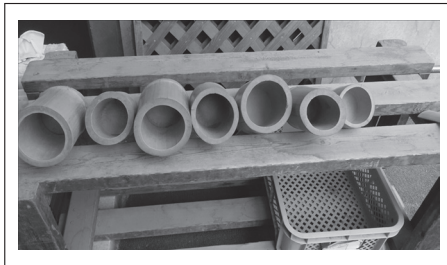


写真5 竹筒を並べる (3歳児)



写真6 音をつくる (3歳児)

このように、子どもたちは、身近にあるものを自らが選択し、取り込みながらものと関わっていった。そのとき、自分がものに働きかけることで、ものから音が発せられることに気づき、また働きかける。そこには、ものとの双方向のやりとり、つまり、ものとの対話がある。子どもたちは、対象であるものに二人称的に関わる中で、ものから生まれ、ものの特性の一つである音を聞くことで、ものの特徴を知っていった。音はものを構成する要素の一つであることがわかる。集中して音を聞き、並べ方を考えたり、繰り返し試したりする中で、子どもの知的好奇心を生み出していった。

### (4) 音でつながる (3歳児)

一人の女児が竹筒を並べて叩き始める(写真7)と、その音を聞いて2人の男児がやって来た。写真8の左の男児が積み木を持ってきたことで、この場の音の種類が広がった。同じ場で自分が選んだものとのやりとりを楽しみながら、自分とは異なるものとのやりとりや、そこから出る音を互いに見たり聞いたりしている場面である。

この後、教師がこの場で歌を歌い出すと、3人は歌に合わせて叩き出し、皆で音を合わせることを楽しんだ。

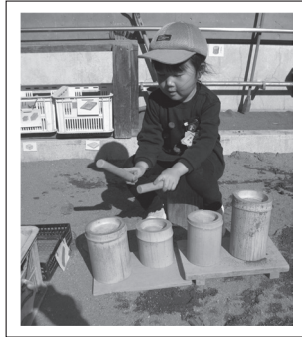


写真7 一人で音を作る



写真8 みんなで音を作る

竹筒と関わる女兒の音が周りに広がり、子どもが集まってきたように、音は聴覚情報の一つとして周りに広がり、人をつなげる。自分の気持ちを音の強弱や拍、リズムなどで表すと同時に、相手の気持ちを、音を介して知ることもできる。そして、子ども同士が音のリズムを共振させたり、呼応させたりすることで、言葉がなくとも人が関わることや人とつながるきっかけとなっていく。また、音を介してその場や雰囲気が作られていった。

## 4. まとめ

### (1) 音を介して対象を深く知っていく

ここで、2. 実践現場からの問いを振り返ってみる。幼稚園教育要領解説の感性と表現に関する領域「表現」では、音に気づいたり、感じたり、音を動きで表現したりなど、音楽に親しむことの目的は、「豊かな感性や表現する力を養うため」と記されていた。

しかし、遊びや生活の中で、子どもたちと音との出会いを見つめてみると、子どもたちは対象であるものやことと出会い、双方向に関わり、対話し、二人称的に関わっていった。その中で、音は、ものやことの構成要素の一つであり、音を介してもものやことの特性に気づいていった。音は、対象を知っていく際の重要な情報であり、ツールでもあることがわかった。それゆえに、音を単に音楽や表現力に結びつけるのではなく、子どもたちの知的好奇心を生み出し、子どもを取り巻く世界を深く知っていくために、遊びや生活の中で子どもたちが音に出会い、音を感じ、音を味わう経験を積み重ねていくことが重要であることがわかった。

また、3-(4)で述べたように、音は聴覚情報の一つとして周りに広がり、人をつなげたり、音の強弱や拍、リズムによってその人の気持ちを表わしたりしていた。音は、ものやことだけではなく、人を知っていく際の情報であり、ツールでもある。音を介して、人やもの、ことを深く知っていくことを可能にする。

### (2) 子どもが感じる世界を感じることの可能性

実践例の幼稚園では、子どもが能動的に人やもの、ことに出会い、二人称的に関わることを大事にした保育があった。様々なものが準備され、子ども自らが自由に選択し、取り込み、じっくりと関わるができる場や時間が保障されていた。

雨降りの日に、ピアノカを手に子どもと一緒に外へ出て、身体を通して雨を感じる姿は、教師自身が雨降りを味わい、面白がっている。だからこそ、子どもが感じる世界に心を寄せることができる。そして、子どもが感じることで世界を深く知っていくように、教師も感じることで、子どもや子どもの世界を深く知っていく。そこには、感じることの二重構造がある。そのとき、教師が子どもにやらせたいことを一方向で「させる」保育ではな

く、子どもと「ともに」あろうとする保育が生まれる。教師が、子どもが感じる世界を感じることによって、教師の子どもの見方や捉え方を変化させ、保育全体の営みの変革の可能性へと拓かれていく。

#### 謝辞

本研究は2021年度の国立音楽大学の学長裁量経費を得て行いました。感謝いたします。

#### 学会発表

日本保育学会第74回大会、自主シンポジウム 企画・提案：林浩子、話題提供：岩田恵子、宇田川久美子 指定討論：佐伯胖「“おもしろさ”がみえるとき－表現を手がかりにして－」の中の話題提供、「音と対話する一音の発見と音作り」で本研究の一部を発表した。日本保育学会第74回大会、富山大学、オンライン発表、2021年5月16日。

注 ここでのアフォード (afford) とは、認知心理学の概念のアフォーダンス (affordance) を意味する。アフォーダンス (affordance) とは、ジェームズ・J・ギブソンの造語で、環境が人間をはじめとする動物に影響を与え、感情や動作が生まれることを意味する。

#### 参考文献

- (1) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2018年。
- (2) V. レディ、佐伯胖 (訳) 『驚くべき乳幼児の心の世界 「二人称的アプローチから見えてくること」』ミネルヴァ書房、2015年。
- (3) 林浩子、岩田恵子、宇田川久美子、佐伯胖、日本保育学会第71回大会 自主シンポジウム企画・提案資料「子どもが感じる世界を感じる－感じることの意味とは－」2018年。